「広報ちな」500号を迎えるにあたり

広報ちな 500号 記念特集

知名町長　平　安　正　盛

平安町長の初号となった「広報ちな55号」

「広報ちな」500号の発行にあたり、以前の担当者として原稿依頼がありましたので寄稿します。

私は、昭和47年４月役場に就職し、当時の企画観光課に配属され、観光と広報を担当することになりました。当時の広報担当に原稿の書き方やカメラの扱い方、紙面のレイアウトなど、未経験の私を手取り足取り教えていただきました。

３か月間の指導を受けた後、先輩から「一人で編集してみろ」と言われ、役場各課からの情報収集をはじめ町内外の取材、原稿作成、レイアウトなどで悪戦苦闘しながら、何とか私の第１号「広報ちな55号」を昭和47年７月に発行することができ、偶然にも私の広報活動のスタートとして「ゴーゴー（55）」となり、思い出深い初号となりました。

そのころのバックナンバーを捲るといろいろなことを思い出します。映画「青幻記」のロケの応援、地域集団電話の開局、カラーＴＶの本格放送、常陸宮殿下のご清遊、全国消防操法大会での本町消防団の活躍等など、今思えば隔世の感を強くするものであります。それまでカメラを手にすることもなく、シャッターチャンスも分からずたびたび失敗することもあり、また文章を書くことが苦手で原稿もなかなか進まず、印刷所への出稿もぎりぎりも度々で、校正も十分にできず、多くの皆様方にご迷惑もかけました。特に氏名の誤記があり「うぶ声」や「おくやみ」の慶弔便りではお叱りを受けたこともありました。

これまでを振り返りますと、広報を作成するうえで多くの方々と接することによる貴重な出会いが、役場経験の浅い私にとって貴重な経験となり、それを通じて得た宝が今の自分の礎となっており感慨無量なるものがあります。

私たちも「広報ちな」を愛読しています

広報”ちな”500号記念 おめでとうございます

尼崎沖洲会
会長　先山和子

広報「ちな」を沖洲会会長として特に興味深くじっくり読むようになりました。

町の人口の推移や慶弔便りは気になりますし、四季折々の島の花々や自然はとてもうれしい郷愁にかられます。

いきいきした子供たちや高齢者の皆さんは全員主役、全員参加型で元気いっぱい、うらやましく思います。

また、町の行事や行政に町民が取り組んでいる様子が数多く紹介され、活気が感じられます。私自身、産業まつりや夏まつり、バレイショの出発式、あしびの郷での音楽祭やフローラル光ネットの開通式、町制施行65周年記念式典など参加する機会に恵まれ、その度に知名町の元気に感動していました。

元気な知名町の様子がよくわかる広報「ちな」の年間ダイジェスト版を作成して、各沖洲会の総会などで映像放映できたら、より多くの会員の方たちが知名町を身近に感じるのではないでしょうか。期待しています。わがふるさと広報「ちな」に感謝をこめて〝ありがとう〟。

通いはじめて15年

石田秀輝・亜子

宮城県仙台市在住
東北大学勤務
知名町徳時に小さな庵（酔庵）を持つ

沖永良部島に通い始めて15年目を迎えました。

最初どういう理由で、この島へ来たのかはっきり記憶してはいません。ただ、どこまでも透明な空や海、黒糖焼酎の旨さ、島人の笑顔と優しさ、天から降って来るような星空…それは、強烈な印象で、それから毎年3、4回の知名町通いが始まったのです。どうして飽きないの？島のどこが素敵なの？何百回も多くの方から聞かれたことですが、なかなか明解に出来ないまま時間が過ぎて行きました。

でも数年前、やっとその理由が見えはじめ、昨年の東日本大震災を経験したことで、明確なかたちになりました。それは、失ってはならない日本のかたち、すなわち、自然に生かされ、活かし、往（い）なすという自然との関わり、字（あざ）を創る人と人との関わり、暮らしのかたち、仕事のかたち、生と死の関わりを今も色濃く持ち続けていることでした。だからこそ、何度来ても飽きるどころか、いつも多くのことを教えられて来たと思うのです。

残念ながら、その島も、一方では地球環境を含め劣化が進み始めています。今こそ、昔に戻るのではなく、失ってはならない日本のかたちを現在版にアレンジし直す、懐かしい未来を創るお手伝いが少しでも出来ればと思っています。

魚釣りも農作業も全く音痴で、いつも皆さんに笑われています。でも、まだまだこの島で沢山のことを学びたいと心から思っています。これからも、お世話になります！お世話してやって下さい！（笑）